

2021年度徳島県保育士等キャリアアップ研修 資料

(2021.12. 6)

絵本 『わたし』 の面白さと5歳児の育ち

1. はじめに

3歳～4歳くらいまでは、自分の立場から周りのものを位置づける（自己中心的）のに対して、5歳児になると周りのものや人から自分を位置づける（他者の目で自分を見ることが出来る）特徴があります。この違いは生活や遊びなどにも現れます。具体的にはどのような違いなのでしょう。

その視点として絵本『わたし』（谷川俊太郎 文・長新太 絵 1981 福音館書店）を参考にしてみます。

2. 絵本のあらすじ

絵本の内容は「わたし」という5歳の女の子を周りの人から見るとどう呼ばれるのか、その変化をとりあげています。「わたし」という人間は変わらないのに、相手との関係によって呼び方が変わる面白さがクローズアップされます。

- ・おとこのこからみると … おんなのこ
- ・あかちゃんからみると … おねえちゃん
- ・おにいちゃんからみると … いもうと
- ・おかあさんからみると … むすめのみちこ
- ・おとうさんからみても … むすめのみちこ
- ・おばあちゃんからみると … まごのみちこ
- ・けんいちおじさんからみると…めいのみっちゃん
- ・さっちゃんからみると … おともだち
- ・せんせいからみると … せいと
- ・ごろう（犬）からみると … にんげん
- ・きりんからみると … ちび
- ・ありからみると … でか
- ・がいじんからみると … にほんじん
- ・えかきさんからみると … もでる
- ・おまわりさんからみると … まいご？
- ・おいしゃさんからみると …やまぐちみちこ5さい
- ・れんとげんでみると … ！（ガイコツ）
- ・おもちゃやさんへいくと … おきやくさん
- ・れすとらんへいくと … おじょうさん
- ・えいがかんへいくと … こども
- ・しらないひとからみると … だれ？
- ・ほこうしゃてんごくでは…おおぜいのひとり

このように家族から親戚、園生活、動物、外国人、そして社会のさまざまな身近な職業へと比較の対象を変えながら面白く展開されます。

3、呼び方の変化と自我の育ち

この絵本の面白さは比較の対象が変わると自分の呼び方も変わることです。名前はいつでも「やまぐちみちこ」ですが、相手との関係や比較の視点によって呼び方が変わります。

「おねえちゃん」「いもうと」「むすめ」「まご」「めい」「おともだち」「せいと」「にんげん」「もでる」「まいご」「おじょうさん」などの言葉はそれぞれに異なった意味（概念）をもっていますが、いずれもある関係を示していることが分かります。例えば「おねえちゃん」は家族の中の姉妹関係、「むすめ」は親子関係、「まご」は祖父母関係、「めい」は両親の兄弟との関係、「おともだち」は同じ世代の仲良し関係を示しています。このように考えると、私たちが使っている言葉には相手との関係が示されているのです。こうした経験を多くつむことによって子どもたちは少しずつ「私って何者なんだろう」「私って他の人から見るとどういふ存在なんだろう」と気づきはじめる（いわゆる「自我の育ち」）のだと思います。

これらの言葉の示している関係に気づくと子どもたちは自分の立場を意識しはじめます。「おんなのこ」「おねえちゃん」を意識することによって、その社会で期待されている役割を担おうとします。その言葉にふさわしい自分になろうとするのです。それは言葉や行動に表れます。園生活の中では一人でしてみようとしたり、自分より幼い子どもたちにやさしく接したり、物事に責任を感じるようになるなど年長としての育ちを見せるようになるのです。

また、この絵本の中には「おじょうさん」「おきやくさん」「もでる」などの言葉も出てきます。日常的にはあまり経験できないことかもしれませんが、そのように呼ばれるうれしさを味わうに違いありません。「え、わたしがおじょうさんなの。うれしい、でもどうしたらいいのかな？」と思うのではないのでしょうか。子どもたちにはうれしかったり、恥ずかしかったりしますが、そう呼ばれるのにふさわしい態度や行動を演じようと努力し、いつかは身につけるのです。もちろん期待しすぎると子どもに無理をさせてしまうこともあるので要注意です。

4、3歳児と5歳児との違い

この絵本に描かれているのは5歳児の姿ですが、3歳児とはどこが違うのでしょうか。はじめに述べたように3歳児は、自分の立場から周りのものを位置づけるのに対して、5歳児は周りのものや人から自分を位置づけると言われます。例えばこの絵本なら、3歳児は「うちのあかちゃん」「これはおにいちゃん」「わたしのおかあさん」「おばあちゃん」「いっしょにあそぶ さっちゃん」「わたしのせんせい」「となりのおばさん」「ごろう」「きりん」などと自分を中心に置いた呼び方になります。園生活の中ではバスを運転して乗せてくれるおじさん、給食を作ってくれるおばさん、熱を計ってくれる人のように自分との関係で相手を位置づけるのです。

それに対して5歳児は他者から自分を位置づけることができます。絵本に表されているむすめ、まご、めい、せいと、にんげん、にほんじん、もでる、

おじょうさんなどはそうした言葉です。相手の人にとって自分はどのような位置づけ（関係）になるのか考えるのです。

5、遊びや生活に表れた5歳児の育ち

他の人の視点で自分を位置づけられる5歳児の育ちはどのような形で他の面に表れているかを知るために幼稚園に出かけてみました。さまざまな事例をお聞きすることができました。その中からいくつか紹介してみます。

言葉に関して3歳児は自分中心になりがちです。昔のお兄ちゃんの写真を見ているとき「あっ、おにいちゃん、ぼくの靴はいてる」と言ったりします。以前はおにいちゃんのものであったのに、履けなくなってお下がりとして自分のものになっていることが理解できないのです。

電車に乗っても、3歳未満児は「おうちが走ってる」と言ったり、昼間の空に月が残っていると「お月さん迷子になった」「道を忘れたのかな」などと言います。

また、3歳児は母親の実家行ったとき、母親が「お父さんただいま、しばらくです」と言うと、「お母さん、『おとうさん』じゃないよ、『おじいちゃんだよ』」と言ったりします。5歳児は、「おじいちゃんは、お母さんからみると『おとうさん』なんだ。でも、自分から見ると、『おじいちゃん』になる」ことが理解できるのです。

描画に関しては、3歳児は色や形にあまりこだわりがありません。桜の花の絵を描くとしてもピンク色にこだわったり、5枚の花びらにこだわったりしません。色を塗ることが面白いのです。指先の器用さがともなわないこともあり「なぐり描き」が見られます。それも肘を中心とした弧のような形が多いようです。描く意識よりは用紙に手の動きに応じて跡が残ることに面白さを感じているのです。

落書きなどがそうです。クレヨンなどを握れるようになったとはいえ、まだまだ指先をコントロールして○や△などの形を描くのは難しいようです。○になるようにとじたり、△の端をつなげないのです。また、人物を描いても頭足人が特徴的です。

4歳児頃になると絵の中に地平線を描いたりします。それは毎日の着脱などの際に自分の身体への興味をもったり、見えない世界(土の中)にも生き物がいたりお芋ができることを知るようになるからです。5歳児は、かなり手指の発達が進み、指先をコントロールして描きたいものを自由に描けるようになります。だから自分が見たものや経験したことを細かく描こうとする（虫のトゲや車のメーター、クラスの友だちのようすなど）のです。また、5歳児はまだそうはなっていないが、これからなりたい自分を意識しています。つまり、自分を他者の目でみられるのです。だから自分の思ったように描けないもどかしさや描いたものを他の人に理解してほしいという願い、さらには他者の評価を気にする傾向があります。

砂遊びでは3歳児はそれぞれマイペースで遊びますが、5歳児は役割を分担して協同的に遊びます。そこには言葉の獲得や友達関係の広がりがあるのです。

5歳児の大きかりなダム作りを見て3歳児が加わりたがります。黙って見ていると水に足を入れジャブジャブします。砂の山などには足で踏みつけようとし、全く悪気はありません。面白そうだからそうするのです。してみたいからするのです。そのようにされた5歳児の気持ちは**まだ考えられない**のです。

5歳児は当然ながら嫌がります。自分たちの遊びの計画がこわされるからです。でも近くに保育者がいたりすると、3歳児を無理に排除することもできなくて、困ってしまいます。保育者は「今日ごめんね、3歳児さんを許してね、悪いことをしていると思ってないのよ。今度の時は年長さんだけで、ゆっくりあそべるようにするからね」などと伝えたりもします。つまり、3歳児は、まだまだ自分の世界の中だけで（自分中心）生活していて相手の立場や気持ちを理解できないのです。

劇遊びではどうでしょうか。3歳児ではあまり劇遊びは見られません。見せたい意識はほとんどないからです。保育者が手伝えればできることもあります。あまり自分たちから劇をすることはありません。ままごと遊びはします。3歳児のままごとでお母さん役が複数いることは珍しくありません。それが4歳頃になると1人になるのです。どうしてでしょうか。友達と遊んでいるうちにどの家庭でもたいていはお母さんが1人であることに気づくのだと思います。5歳児の劇ではストーリーや条件設定を言葉で確認し、役割を分担する必要性や他者に見せる意識をもつようになります。5歳児になるとどうして他者の目で自分を見たり、役割分担ができたり、**なりたい自分の理想像（自分の人生を歩みはじめるともいえます）**をもつようになるのでしょうか。

その条件はなんのでしょうか。それは、言葉や友達関係の広がりです。中でも言葉の役割は大きいと思います。言葉を獲得することは自分の世界をもち、自分の人生を生きることなのです。

基本的な生活習慣についてはどうでしょうか。3歳児は手を洗うことや片づけは自分からはできませんが、保育者に促されると素直にできます。手の清潔や片づけの必要性を自分で意識できないのです。だが、5歳児はそれらがなぜ必要なのか理解しています。でも、友達と遊ぶ時間が惜しくて手洗いをごまかしたり片づけをさぼったりします。これもある種の発達だと思います。

寒さや暑さに関しては、3歳児は「息が白いよ」「手がつめたい」「汗がいっぱい」などと表現します。自分の手や身体を用いて感覚的に表現するのです。5歳児は、その感覚的な表現に加えて、客観的な視点からの説明もします。例えば、暑い日に寒暖計を見にいき「30度こえている、だから暑いんだよ」などといえるようになるのです。

6、おわりに

絵本『わたし』に示された5歳児の育ちは他の遊びにも表れています。他者の評価を気にしたり、役割分担したり、あるいは生活の見通しを持てることなどです。3歳と5歳児の育ちの違いを理解することはこの3年間の育ちの過程を考えることでもあり保育者として大切な視点だと思います。